

英語のイントネーション研究

—その抽象度—

澤村香代子

1. はじめに

英語のイントネーション（以下：イントネーション）についてはこれまでに多くの研究がなされ、記述されてきた。特にイギリスでは伝統的にイントネーションは教育的な目的をもって研究されてきた。特に第二次大戦後の英語学習者の増加や、オーディオ機器の発達により音声の保存が可能になったことは、より詳しいイントネーション研究のきっかけとなるものであった。

イギリスで伝統的に記述されてきたのが音調と心的態度（感情的な意味）の関係である。こうしたアプローチはSweet (1906) に始まったとってよいだろう。音調の種類を挙げ、音調と陳述や質問などの文のタイプとの関係を示し、話者の態度や感情を示すというものである。例えば、ある音調のパターンとある文タイプの組み合わせは話者の「冷淡な」態度を表し、またあるパターンと文タイプの組み合わせは話者の「穏やかな」態度を表すというように記述されている。Armstrong and Ward (1931)、Palmer (1933)、Kingdon (1958)、Schubiger (1958)、O'Connor and Arnold (1961, 1973)、Gimson (1962)、Crystal (1969) とも同様のアプローチで心的態度を記述している。アメリカ英語のイントネーションについては、Pike (1945) やLieberman (1979) らが心的態度を中心とした研究をしている。主にイギリスを中心としてイントネーション研究は心的態度中心の

流れがあったということができる。そうした流れの中で、Halliday (1967) はイントネーションの心的態度以外の機能を指摘し、イントネーションと意味との対立を示した。心的態度を「情緒的な意味」とするならば、Halliday (1967) の示した意味はいわば「言語学的な意味」と言えるであろう。このようなHalliday (1967, 1970) の研究はTench (1990, 1996) に受け継がれ、さらに発展していく。

本稿では心的態度中心の伝統的なアプローチと、その伝統の流れに一石を投じたHalliday (1967, 1970)、Tench (1990, 1996) のアプローチを詳しく見ることで、同じ現象を説明しているにもかかわらず、なぜ違う記述にいたったのか、その原因を探る。さらにそのうえで、イントネーションの最適な記述の方法について、抽象度を考慮に入れながら考察し、今後のイントネーション研究がどのように変わっていくかを予測したい。

2. 2つのアプローチ

2.1 伝統的アプローチ

ここでは音調と心的態度との関わりについて研究者の例を挙げながら具体的にみていくことにする。この研究は、イントネーションが話者の態度や感情、つまり心的態度を表す役割を担っているということから進められたものである。研究者はそれぞれに独自の音調の種類、文のタイプ、心的態度を詳細に示してきた。以下ではこれまでに見られた音調と、心的態度の記述について見ていく。

2.1.1 音調群

音調に関しては音調群 (tone unit, tone group) で説明されることが多い。音調群とは前頭部 (pre-head)、頭部 (head)、核 (tonic, nucleus)、尾部 (tail) という要素から成る。前頭部は発話の最初の無強勢音節をい

い、頭部は発話の最初に位置する強勢音節（ないしは強勢音節を含み核音節の前までを含む部分）のことをいう。核は強勢音節とともに、音調の変化が起こる音節のことをいい、尾部は核に続く音節のことをいう。前頭部、頭部、尾部は発話によってはないこともある。Roach (2000) は音調群について以下のような発話例を用いて説明し、下記の発話は5つの音調群(5stone-units) からなるとする。PHは前頭部、Hは頭部、TSは核音節、Tは尾部を表している。下線は核音節、[||] は音調群の境界、[|] はポーズのない音調群の境界、['] は強勢、[∖] は下降調、[∕] は上昇調、[∨] は下降上昇調、[|] は各要素の境界を示している。

PH	H	TS	PH	TS	PH	H
and then	'nearer to the	∨front	on the	∕left	there's a	'bit
TS	T	H	TS	T	PH	H
of	∖for	est	'coming 'down to the	∖wa	terside	and then a 'bit
TS	∕bay					
of a	∕bay					

(Roach,2000: p. 166)

2.1.1.1 核音調

核音調に関してはどの研究者も、下降調 (fall)、上昇調 (rise)、下降上昇調 (fall-rise) の3つの音調を基本としている。ただ、単に下降調、上昇調とするのではなく、高下降調 (high fall) や、低下降調 (low fall)、高上昇調 (high rise) や低上昇調 (low fall) というように分けられていることが多い。Schubiger (1958)、Gimson (1962)、Halliday (1967, 1970)、O'Connor and Arnold (1973) に共通して見られる核音調は低下降調 (low fall)、高下降調 (high fall)、低上昇調 (low rise)、高上昇調 (high rise)、下降上昇調 (fall-rise)、上昇下降調 (rise-fall) の6つである。Schubiger (1958) は6つのほかに上昇下降上昇調 (rise-fall-rise) がある

とし、7つの核音調を認めている。Halliday (1967, 1970) は6つの音調のほかに低下降上昇調 (low fall-rise)、低上昇下降調 (low rise-fall)、高下降高上昇調 (high fall-high rise) があるとしている。ただし、Hallidayは基本型 (basic form) として下降調 (tone 1)、高上昇調 (tone 2)、低上昇調 (tone 3)、下降上昇調 (tone 4)、上昇下降調 (tone 5) を挙げ、複合音調 (compound tone) として下降低上昇調 (tone 13) と、上昇下降低上昇調 (tone 53) を挙げ、これらの音調を第一次音調 (primary tones) とし、それ以外の音調については第二次音調 (secondary tones) として区別している。したがって、Halliday (1967, 1970) の分類では他の研究者と共通である低下降調 (low fall) と高下降調 (high fall)、また低下降上昇調、低上昇下降調、高下降高上昇調は第二次音調に属するということになる。O'Connor and Arnold (1973) は6つのほかに中平坦調 (mid-level) があるとしている。アメリカ英語のイントネーションを研究したPike (1945) はピッチのレベルを4つに分け、高 (high) を1、中高 (mid high) を2、中低 (mid low) を3、低 (low pitch) を4とした。そして4への下降 (falls to low)、3への下降 (falls to mid low)、2への下降 (falls to mid high)、3からの上昇 (rises from mid low)、4からの上昇 (rises from low)、2からの上昇 (rises from mid high) を下降調、上昇調の種類として挙げ、その他下降上昇調、上昇下降調、平坦調を核音調の種類として挙げている。

2.1.1.2 頭部 (head)

核音調の前に起こる音調の分類は研究者によってさまざまである。Schubiger (1958) は核音調ごとにいくつかの頭部 (head) のパターンがあるとしている。低下降調には5種類、高下降調には3種類、低上昇調には4種類、高上昇調は1種類、下降上昇調には2種類というように、1つの核音調はいくつかの頭部のパターンを持つようになっている。Gimson (1962) もこれに似た頭部のパターンであるが低下降調には3種類、高下

降調には4種類、低上昇調には5種類というように、Schubiger (1958)のそれとは異なっている。ⁱ 頭部と核の組み合わせが心的態度を示すとして記述する研究者が多い中で、Pike (1945) は頭部について、核ほど強く心的態度を示してはいないが、基本的には独立したものと見ており、分類ごとに心的態度を記述している。ⁱⁱ

2.1.2 心的態度

上で述べたとおり、音調の分類はさまざまである。こうした音調ごとに心的態度が各研究者によって述べられている。多くは音調のパターンごとに陳述 (statement)、命令 (command)、Wh-疑問 (Wh-question)、yes/no-疑問 (yes/no question)、感嘆 (exclamation, interjection) などの文タイプが示され、心的態度が記述されている。ここで、Gimson (1962) と、O'Connor and Arnold (1973) の心的態度の記述の一部を見ておく。

(1) Gimson (1962)

Gimson (1962) は高下降調 (high-falling)、低下降調 (low-falling)、高上昇調 (high-rising)、低上昇調 (low-rising)、下降上昇調 (falling-rising)、上昇下降調 (rising-falling) の6つの核音調があるとし、頭部との組み合わせで文タイプごとに心的態度を記述している。文タイプは (a) 断言 (assertions)、(b) Wh-疑問 (questions containing an interrogative word)、(c) yes/no-疑問 (questions expecting 'Yes' or 'No' as an answer)、(d) 付加疑問 (question tags)、(e) 命令・要求など (commands, requests, etc.)、(f) 感嘆・挨拶など (exclamations, greetings, etc.) の分類となっている。以下に、下降調、上昇調の記述の一部を示しておく。[\]

i Gimson (1962) は頭部 (head) と胴部 (body) を分けているが、Gimsonの頭部+胴部は他の研究者にとっての頭部にあたるため、本稿では頭部として扱っている。

ii 頭部と核のパターンについては、'Complex Contour' の中で頭部が中高で核が低の平坦調 (2-°4-4) の一組が挙げられている。[°] は核音調の始まりを示している。(Pike, 1945: p. 69)

は低下降調、[/] は低上昇調、[ˈ] は第二アクセント (Secondary accent)、[ˌ] はピッチ卓立のない第二アクセント (Secondary accent without pitch prominence) を示している。Gimson (1962) は発話の初めに出てくる第二アクセントもしくはピッチ卓立のない第二アクセントを頭部 (head) であるとしている。

頭部が低 (low) で核音調が低下降調 (low-falling) の場合：

- (a) It's ˌall we could exˌpect (surly, uninterested)
- (b) ˌWhat are we ˌgoing to ˌdo? (resigned, bored)
- (c) ˌHave you ˌgot the ˌtickets? (uninvolved, perfunctory)
- (e) ˌLeave it ˌon the ˌtable (pre-occupied, expecting to be obeyed as a matter of course)
- (f) ˌHow aˌnnoying (bored, unconcerned, sarcastic)
- ˌGood ˌmorning (routine, perfunctory greeting)

(Gimson, 1962: p. 255)

上記の例では (d) の付加疑問についての記述はない。

頭部が高 (high) で核音調が低上昇調 (low-rising) の場合：

- (a) It's ˈall /right. It ˈdoesn't /matter. She ˈwon't be/long (reassuring statements). Also dependent clauses occurring before the main clause, e.g. 'ˈWhen we a/rrived, (they'd alˈreadyˌgone)'; following a main clause containing a falling nucleus, the pre-nuclear pattern of this dependent clause is likely to be low, e.g. '(They'd alˈreadyˌgone), ˌwhen we a/rrived' .
- (b) ˈWhat's the /time? (polite, inquiry)
- (c) ˈCan you /come? (polite interested)

- (e) ¹Sit /down. ¹Come over /here (pleasant, encouraging invitation)
 (f) ¹All the /best. ¹Good /luck (cheerful good wishes) . ¹Good
 /morning (cheerful, friendly greeting)

(Gimson, 1962: p. 257)

Gimson (1962) はこのほかに14の音調のパターンがあるとしており、それぞれ上記のように文タイプに分け、発話ごとに心的態度を記述している。ただ、上記の低下降調の例のように、文タイプによって例がないこともある。また、頭部が低 (low) で、核音調が高下降調 (high fall) の場合には文タイプにかかわらず、“highlighting focus of information” とされ、感嘆 (exclamation) にのみ “bright, cheerful (greeting)” が付け加えられているというものもある。

(2) O'Connor and Arnold (1973)

O'Connor and Arnold (1973) は音調のパターンを10種類に分け、それぞれに名前を付けている。O'Connor and Arnold (1973) の翻訳版では、低落下型 (The Low Drop)、高落下型 (The High Drop)、離陸型 (The Take-Off)、低バウンド型 (The Low Bounce)、スイッチバック型 (The Switchback)、幅跳び型 (The Long Jump)、高バウンド型 (The High Bounce)、ジャックナイフ型 (The Jackknife)、高飛び込み型 (The High Dive)、テラス型 (The Terrace) という訳語が付けられている。心的態度と音調の記述に関しては、多くの研究者が頭部と核が心的態度に関わるとして、「頭部—核」という音調パターンで心的態度を説明しているのに対して、O'Connor and Arnold (1973) は頭部のほかに前頭部 (pre-head) も心的態度に関わっているとし、「前頭部—頭部—核」の音調パターンで心的態度を記述している。また、Gimson (1962) が発話例ごとに心的態度を記述しているのに対して、O'Connor and Arnold (1973) は文タイプごとにいくつかの心的態度が記述されている。以下の表は高落下型 (The High Drop) の文タイプごとの心的態度である。この場合の音調は、前頭

部が低 (low)、頭部が高 (high)、核音調が高下降調 (high fall) となっている。

文タイプ	心的態度
Statement	involvement in the situation, participation, lightness, airiness, warmth
Wh-questions	brisk, businesslike, considerate, not unfriendly, bright, interested
yes/no questions	lighter, less urgent, sceptical, demanding agreement, mild surprise but acceptance of the listener's statement
Commands	suggest a course of action
Interjections	mild surprise, less reserved, less self-possessed

O'Connor and Arnold (1973)

上記では二人の研究者の心的態度の一部を見たわけであるが、他の研究者も音調の分類や心的態度に多少の違いはあるものの、同じような方法で心的態度を記述している。これがイギリスで伝統的に採用されてきたアプローチである。次項ではHalliday (1967, 1970) とTench (1990, 1996) のアプローチを見ていく。

2.2 Halliday (1967, 1970)、Tench (1990, 1996) のアプローチ

Halliday (1967) はイントネーションが、トナリティ (tonality)、トニシティ (toncity)、トーン (tone) という3つの意味を明確にする選択 (three distinct meaningful choices) を持っているのだとしている。トナリティは音調群 (tone group) の設定をし、トニシティは核の設定をし、トーンは音調の設定をするとして、以下のように定義している。

It can be seen, therefore, that in any utterance in English three distinct meaningful choices, or sets of choices, are made which can

be, and usually are, subsumed under the single heading of “intonation”. These are: first, the distribution into tone groups — the number and location of the tone group boundaries; second, the placing of the tonic syllable (in “double tonic” tone groups, the two tonic syllables) — the location, in each tone group, of the pretonic and tonic sections; third, the choice of primary and secondary tone. I propose to call these three systems “tonality”, “tonicity” and “tone”.

(Halliday, 1967: p.18)

Tench (1990, 1996) はHalliday (1967) によって初めて挙げられたこれら3つの選択について、「発話の言語学的意味」との関わりを、例を示しながら詳しく述べている。

2.2.1 トナリティ (Tonality)

上で述べたとおり、トナリティは音調群の設定をする。Tench (1996) はトナリティが情報の操作をするとして以下の例を使って説明している。[|] は音調群の境界を示している。

(1.a) I'm going into town this morning

(1.b) I'm going into town | this morning (Tench, 1996: p. 9)

(1.a) と (1.b) の違いは音調群の数である。Tenchは1つの音調群は1つの情報を伝えるとしている。この場合、(1.a) は情報が1つで、(1.b) は情報が2つとなる。(1.b) の *this morning* はあとから思いついたこと (afterthought) を付け加えた発話であるとしている。(1.a) は *I'm going into town this morning* という1つの情報で、(1.b) は *I'm going into town* という情報に、後から *this morning* という情報を付け加えたものであるとしている。さらにTenchはこうした情報の操作が文法的なことにも

関わってくるとして、次のような例を挙げている。

(2.a) My brother who lives in Nairobi | ...

(2.b) My brother | who lives in Nairobi | ... (Tench, 1996: p. 40)

これは関係代名詞の制限、非制限がトナリティによって区別されている例である。この場合、(2.a)は「ナイロビに住んでいる兄弟が…」ということになり、ほかにも兄弟がいる可能性のある制限用法の発話となっている。それに対し、(2.b)は2つの情報から成り、「私の兄弟が、ナイロビに住んでいるのですが…」という意味になり、兄弟がほかにはいないという可能性を示す非制限用法を示す発話となっている。このようにトナリティは音調群を設定することで情報の操作をし、それが発話によっては文法的な意味にも関わるのだとしている。

2.2.2 トニシティ (Tonicity)

トニシティは音調群の中で核の設定をする。Halliday (1970)は核が情報の焦点 (focus of information) を形成するとして、次のように述べている。

The function of the tonic is to form the focus of the information: to express what the speaker decides to make the main point or burden of the message. (Halliday, 1970: p. 40)

このように、核の機能は話者が伝えたい情報の焦点を形成することにあるとしている。即ち、核は情報の焦点を示す語の強勢のある音節に置かれる。Tench (1996)の例を見てみる。下線は核音節を示している。

(3.a) Can you break an apple in two?

(3.b) Can you break an apple in two?

- (3.c) Can you break an apple in two?
 (3.d) Can you break an apple in two?
 (3.e) Can you break an apple in two? (Tench, 1996: pp. 55-56)

(3.a) は「りんごを2つに割ることができるか」という発話になる。これに対して (3.b) は、「何かを2つに割る」ということが前提としてあり、*apple*に核を置くことで、「ではりんごは割れるのか」ということを新たに聞いているものであるとしている。(3.c) の発話は、動作について新たに聞いている発話で、「切る」などの動作と対照させて、「では割ることはできるのか」という意味になるとしている。(3.d) はほかの誰かと対照させて新たに、「ではあなたはりんごを割ることができるのか」という意味になるとしている。(3.e) は「りんごを2つに割る」ということは前提としてあるが、それが可能かどうかということについての発話となっている。このように、核の位置を変えることで情報の操作をしているとしている。また、トニシティは発話によってトナリティと同様に、文法的な意味を変えることもあるとしている。

- (4.a) He asked himself
 (4.b) He asked himself (Tench, 1996: p. 70)

(4.a) は*asked*が核となることで、他動詞となり、「彼は自分自身に聞いた」という意味になり、(4.b) は再帰代名詞に核が置かれることで、*asked*が自動詞となり、「彼は自分で聞いた」という意味になる。このように情報の焦点の形成が文法的な意味に関わることもあるとしている。

2.2.3 トーン (Tone)

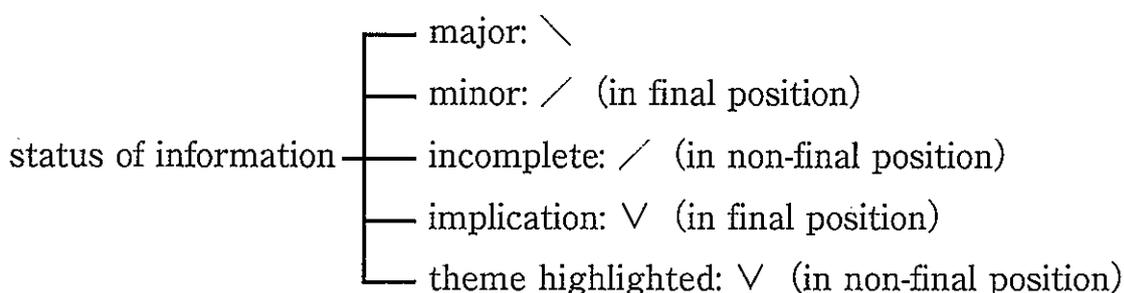
トーンとは音調の選択であるが、音調の変化は核だけではなく、前頭部や頭部でも現れる。Halliday (1967, 1970) は核のみに関わる第一次音調

(primary tones) と核、前頭部、頭部に関わる第二次音調 (secondary tones) とを区別した。この区別はTench (1996) に引き継がれ、第一次音調は核音調の種類、つまり、下降 (fall)、上昇 (rise)、下降上昇 (fall-rise) というようなもので、第二次音調は核での音調の変化の度合いや、前頭部、頭部での音調であるとして、以下のように説明している。

Primary tones are the basic contrastive pitch movements on the tonic, i.e. whether the pitch of the voice moves up (rises), or moves down (falls), or combines a movement of down and then up (fall-rises). Secondary tones are the finer distinctions of the primary tones, i.e. the degree to which the pitch of the voice rises, falls or combines a fall and a rise — whether there is, for example, a rise to a high pitch or a mid pitch, or a fall from a mid pitch or a high pitch, etc. Secondary tones also cover the pitch movements in the pre-tonic segment (the head and the pre-head).

(Tench, 1996: p. 73)

Tench (1996) は下降調 (fall)、上昇調 (rise)、下降上昇調 (fall-rise) の3つの音調を第一次音調とし、トナリティ、トニシティと同様に情報の操作に関わるのだとしている。Tench (1996) は以下のように、下降調は主情報 (major information)、発話の最後に現れる上昇調を副情報 (minor information)、発話の途中で現れる上昇調を未完 (incomplete)、発話の最後に現れる下降上昇調を含み (implication)、発話の途中で現れる下降上昇調を話題化 (theme highlighted) を表しているとして図にまとめている。[\] は下降調、[/] は上昇調、[V] は下降上昇調を表している。



(Tench, 1996: p. 86)

Tench (1996) はこうした情報の操作について、以下のような発話を例に挙げて説明している。以下の例はTench (1996, pp. 80-85) からの引用である。

(5) But he didn't go to \bed | though he was /tired

この例において話者は*But he didn't go to bed*ということ伝えようとして、後から*though he was tired*を付け加えたのだとされている。したがって、(5) は前の音調群で下降調を伴った主情報、後の音調群は上昇調を伴った副情報の発話であるという。

(6.a) Un/fortunately | he can't \come

これは (5) の例とは逆で、前の音調群が上昇調を伴い、あとの音調群が下降調を伴ったものである。この場合、上昇調は未完であるとされ、まだ発話が続くということが表されている。これが (6.b) のように上昇調が下降上昇調に変わると意味も変わってくるとしている。

(6.b) Un∨fortunately | he can't \come

(6.a) での上昇調は単に発話がつづくということが表されているにすぎないが、(6.b) での下降上昇調は話題化とみなされ、注意を喚起した発話で

あるとされる。このように、発話の途中で現れる下降上昇調は発話の話題を目立たせるものであるとされている。次に、発話の最後に現れる下降上昇調について、同じ語順でトナリティが違うものと比較した例を見てみる。

(7.a) I didn't come | because he told me

(7.b) I didn't come because he ∨told me

(7.a) は音調群が続いた発話であり、「わたしは来なかった、彼がそう言ったから」ということを意味したものであるとし、(7.b) の下降上昇調は含みであるとされ「彼がそう言ったから来たわけではない」といった意味になるとしている。この場合、(7.b) においては「来たのにはほかの理由がある」といった意味を含んでいるのだとしている。このように、同じ語順でも、トナリティやトーンによって意味が逆になることもあるのだとしている。

2.2.4 話者の意思伝達におけるドミナンス (dominance) とデファランス (deference)

Tench (1996) はトーンの第一次音調が、トナリティ、トニシティと同様に情報の操作をするほかに、話者の意思を伝達するときに働くのだとしている。

The primary tones of English, i.e. the fall, the rise and the fall-rise, function, like tonality and tonicity, in the organization of information, but they also feature, like the other systems, in a second function. Whereas tonality and tonicity produce contrasts in grammar, the tone system produces contrasts in the communicative, or illocutionary, function; that is, they help to indicate differences between telling and asking, between commanding and requesting, between congratulating and wishing, and a whole host of similar

functions that language is used to fulfil. (Tench, 1996: p. 74)

このように、話者が陳述している (telling) のか、尋ねている (asking) のか、命令している (commanding) のか、要請している (requesting) のか、祝辞を述べている (congratulating) のか、願っている (wishing) のかという意思の伝達にトーンが関わるのだとしている。こうした意思の伝達は話者と聞き手の関係性の観点から2つに分けることができるとしている。1つは話者が主体となった発話で、もう1つは聞き手が主体となった発話である。Tench (1996) はこうした話者主体であることをドミナンス (dominance) とし、聞き手主体であることをデファランス (deference) とし、ドミナンスは下降調で、デファランスは上昇調で表されるとした。例えば、上記の陳述、命令、祝辞は話者の知識や権威、感情が支配しており、話者主体のドミナンスであるという。それに対して、尋ねること、要請、願うことというのは、話者に確信はなく、聞き手に何らかの決定を委ねており、聞き手主体のデファランスであるという。Tench (1996) の発話例を見てみると、この分類はさまざまな状況の中で使われていることがわかる。以下の例はTench (1996, pp. 92-99) からの引用である。

(8.a) He's finished with my \book | \hasn't he

(8.b) He's finished with my \book | /hasn't he

これは話者が知っているのか、知らないのかという違いで、(8.a) は話者が知っていて、話者の中ですでに処理された発話であるとし、(8.b) は話者が知らないために、聞き手に尋ねる発話であるとされている。

(9) /What did you say you're going to do

この発話については、咎め・説明の要請 (challenge) にも、単に聞き逃したための繰り返しの要請 (request for a repetition) にも取れるとして

いるが、いずれにしても聞き手に対して要請・依頼しているものであるとしている。このように通常下降調を伴うとされてきたWh-疑問の発話も、話者が聞き手に対して説明を要請したり、繰り返しを依頼している場合には上昇調のデファランスになるとしている。

(10) Can you pay me by \cheque please

これは通常上昇調を伴うとされてきた発話が下降調を伴っている例である。Tench (1996) によれば、この発話の意味するところは、‘That’s what I want you to do’ ということであり、話者主体のドミナンスの発話であるという。

(11.a) You should take a little \break

(11.b) You could take a little /break

(11.a) はあくまでも話者の意見が述べられた発話で、意味するところは‘That’s what I think you should do’ であるという。それに対して、(11.b) の意味するところは‘That’s one possibility you could consider doing’ であり、聞き手に決定を委ねた発話であるとしている。

なお、第二次音調については、第一次音調とは違い、情報の操作や意思伝達の働きはなく、心的態度に関わるものであるとしている。Tench (1990, 1996) もイントネーションが話者の心的態度を表す働きがあるということを認めており、第二次音調とともに心的態度も記述されてはいるが、上記のように、トナリテイ、トニシテイやトーンの第一次音調までを大きく扱っている。ⁱⁱⁱ

iii Tench (1996) はイントネーションの機能について、The organization of information, The realization of communicative functions, The expression of attitude, Syntactic structure, Textual structure, The identification of speech stylesの6つを挙げている。

3. イントネーションの機能に対する認識の違い

上記のごとく、伝統的な心的態度を中心としたアプローチと、Halliday (1967, 1970)、Tench (1990, 1996) のイントネーションのアプローチでの記述には大きな違いがある。同じ現象に対してここまで違っているのはなぜなのか。ここでは研究者が、イントネーションの機能をどのように認識しているのかを見ることでアプローチの違いの根本的な原因を探っていく。

伝統的アプローチで記述している研究者は心的態度をイントネーションの機能の中心として据えている。Pike (1945) はイントネーションが話者の心的態度をつけ加えることによって語彙の意味 (lexical meaning) を変えるのだとして以下のように述べている。

In English, then, an INTONATION MEANING modifies the lexical meaning of a sentence by adding to it the SPEAKER'S ATTITUDE toward the contents of that sentence (or an indication of the attitude with which the speaker expects the hearer to react).

(Pike, 1945: p. 21)

またO'Connor and Arnold (1961) は次のように述べている。

The contribution that intonation makes is to express, in addition to and beyond the bare words and grammatical constructions used, *the speaker's attitude to the situation in which he is placed.*

(O'Connor and Arnold, 1961: p. 2)

このように伝統的アプローチでは心的態度を表すということが、イントネーションの役割であるとして重要視する傾向にあった。心的態度を中心的に扱い、研究を進めた結果、上で見てきたような、音調と心的態度との関係の詳細な記述となっていた。上記のGimson (1962) やO'Connor

and Arnold (1973) の例では、1つの音調パターンに対して多くの態度が記述されている。また、その逆に、O'Connor and Arnold (1973) においては、1つの態度に対して複数の音調パターンが示されるということが起こっている。さらには、研究者が独自に音調を分類し、心的態度を記述しているために、同じ音調パターンに対して研究者によって違う心的態度を記述しているということまで起こっている。このようなことから、心的態度に特化した研究というものは、「ある音調パターンはどういった心的態度を表すのか」、または「ある心的態度はどういった音調で表されるのか」ということに基づいて記述されたもので、「1つの音調に、1つの心的態度」という対立があるというわけではないのだということがわかる。

これに対して、Halliday (1967, 1970) や Tench (1990, 1996) はイントネーションが情報の操作をすることや、文法的な意味の区別にも関わるということを中心として研究をした。Tench (1996) は話者が発話しようとして、語彙や文法によって言いたいことを公式化したあと、以下の方法で音韻的にコード化するとしている。ここからは Tench (1996) の心的態度に対する認識が見てとれる。

1. the consonants, vowels and stress patterns of the words
2. the rhythm and intonation of the syntax of the clauses
3. the units, focus and status of the successive pieces of information
4. communicative functions
5. and, if desired, by means of the secondary tones, an indication of a state of mind

(Tench, 1996: p. 108)

5番目の項目のとおり、第二次音調で表される心的態度については任意のものであるとし、イントネーションの働きの中心には据えず、イントネーションが情報の操作や文法的な意味に関わるということを中心に据えているのである。ここが、Halliday (1967, 1970) と Tench (1990, 1996) の記

述が、伝統的な心的態度を中心とした記述と大きく異なっている点である。Halliday (1967, 1970) やTench (1990, 1996) の記述には、言語学的意味の対立が存在しているのである。音調群の設定をするトナリティ、核音節の位置を決定するトニシティ、音調を設定するトーンの第一次音調、これらにはすべて言語学的意味の対立が見られる。そして音調に関しては、Halliday (1967, 1970) もTench (1990, 1996) も、言語学的意味の対立があるものを第一次音調とし、言語学的意味の対立が明確でないものを第二次音調として分けている。つまり、これは言語学的意味の対立のある体系化なのである。このようなHalliday (1967, 1970)、Tench (1990, 1996) による、言語学的意味の対立という観点からのアプローチは、従来のイントネーション研究の流れを根本から変えるにいたったと言えよう。

このように伝統的な心的態度中心のアプローチとHalliday (1967, 1970)、Tench (1990, 1996) のアプローチとではイントネーションの機能に対する認識が異なっている。この認識の違いこそが、同じ現象に対して、ここまで記述が違ってしまった原因と言えるであろう。

4. 結論

心的態度（心情的意味）を中心としたアプローチでは、音調と心的態度との関わりについて、研究者ごとの詳細な記述を見ることができた。また、Halliday (1967, 1970)、Tench (1990, 1996) のアプローチでは、言語学的意味の対立という視点からのイントネーションの体系を見ることができた。2つのアプローチは一見まったく違っているように見えるが、音声現象の抽象化という点では共通している。心的態度を中心とした研究の場合は、記述の量も多く、「1つの音調に、1つの心的態度」という対立もなく、確定性がないもので、抽象度は低いと言える。研究者によってさまざまに分かれる音調の分類も、心的態度の記述も、各研究者がどの程度の抽象度で満足したかということであり、どの記述が正しくて、どの記述が間違っているということではない。しかし、イントネーションの機能を考慮

に入れた場合、心的態度に特化した研究では、抽象の程度に疑問が生じてくる。イントネーションには音調群を設定し、核の位置を設定する働きがあるからである。心的態度中心のアプローチでは、音調群の中で起こっている音調の変化のみを見て、その音調と心的態度との関係を記述した限定的なものとなっている。それに対して、Halliday (1967, 1970)、Tench (1990, 1996) のアプローチは、言語学的意味の対立という視点に立ち、音調群の設定や、核の位置の設定も考慮に入れた研究をしている。音調の分類の面から見ても、第一次音調と第二次音調とに分け、第一次音調のみを言語学的意味の対立が存在するものとして扱い、心的態度を中心とした記述よりも抽象度が高いと言える。このように、イントネーションの研究においては、心的態度を中心とした記述をすると抽象度は低くなり、言語学的意味の対立という視点に立った研究をすると抽象度は高くなるのである。そしてイントネーションは言語学的意味の対立という視点で述べられるほうがより明確であり、安定していると言える。抽象度の観点からいっても、言語学的意味の対立の視点に立ったアプローチのほうがより適していると言えるであろう。

したがって、今後のイントネーション研究は、これまでの心的態度を中心としたアプローチではなく、より言語学的なアプローチで進んでいくのではないだろうか。すでにBrown (1977)、Brazil et al. (1980)、Ladd (1980)、Cruttenden (1997)、Roach (2000) は、イントネーションの機能に関して、心的態度よりも情報の操作を中心として扱っている。さらに、Leech and Svartvikの*A Communicative Grammar of English* (2002) は文法書であるが、イントネーションが意味を変えるのだとして記述されている。ただ、このアプローチが適しているからといって、イントネーションの機能として心的態度が無視されていいということではない。イントネーションに心的態度を表す働きがあるということは事実である。Halliday (1967) も Tench (1996) も心的態度の記述を試みているが、音声的アプローチをした研究者達と同じような記述となっており、そこには言語学的意味の対立は存在していない。では、心的態度はどのように扱えばよいの

であろうか。人間の微妙な感情というのは、体系化することがきわめて難しいものである。またその難しさは、心的態度がイントネーションのほかにも、顔の印象や身振りといった要素でも表されうるというところにも一因があるであろう。心的態度はそれだけ微妙なもので、イントネーションが話者の心的態度を知る手がかりにはなるとしても、心的態度を表す唯一のものではないのである。上記でも述べたとおり、Tench (1996) は心的態度を任意のものであるとしている。このようなことから、イントネーションを記述する際に、心的態度について現時点では、「イントネーションが心的態度を表すことに関わることもある」ということにとどめておくのがよいのではないだろうか。

また、Tench (1996) が意思伝達にイントネーションが関わっているということを見だし、ドミナンス (dominance)、デファランス (deference) という言葉を考えたということは注目すべきことである。これはきわめて抽象度の高い言語学的分類である。これは話者と聞き手との関係性における機能であり、情報の操作や文法的意味との関わりと、心的態度の間に位置しているように思われる。こうした分類がさらに進められれば、関係性と関わりを持つ心的態度に関しては、言語学的意味の対立をもった抽象度の高い分析が可能となることも考えられるであろう。

参考文献

- Brazil, D. (1997). *The communicative value of intonation in English*. Cambridge: CUP.
- Brazil, D., Coulthard, M. and Johns, C. (1980). *Discourse Intonation and Language Teaching*. London: Longman.
- Brown, G. (1990). *Listening to Spoken English*. 2nd edn. London: Longman.
- Brown, G. and Yule, G. (1983). *Discourse Analysis*. Cambridge: CUP.
- Cruttenden, A. (2001). *Gimson's Pronunciation of English*. 6th edn. / Revised by A. Cruttenden. London: Edward Arnold.

- Cruttenden, A. (1997). *Intonation*. 2nd edn. Cambridge: CUP.
- Crystal, D. (1969). *Prosodic Systems and Intonation in English*. Cambridge: CUP.
- Gimson, A.C. (1962). *An Introduction to the Pronunciation of English*. London: Edward Arnold.
- Halliday, M.A.K. (1967). *Intonation and Grammar in British English*. The Hague: Mouton.
- Halliday, M.A.K. (1970). *A Course in Spoken English: Intonation*. London: Oxford UP.
- Halliday, M.A.K. (1994). *An Introduction to Functional Grammar*. 2nd edn. London: Edward Arnold.
- Ladd, D.R. (1980). *The Structure of Intonational Meaning*. Bloomington: Indiana UP.
- Leech, G. and Svartvik, J (2002). *A Communicative Grammar of English*, 3rd edn. Longman
- Liberman, M. (1979). *The Intonational System of English*. New York/London: Garland
- O'Connor, J.D. and Arnold, G.F. (1961). *Intonation of Colloquial English* (2nd edn. 1973). London: Longman.
(片山嘉雄、長瀬慶来、長瀬恵美 共編訳 (1994). 『イギリス英語のイントネーション』. 南雲堂.)
- Pike, K.L. (1945). *The Intonation of American English*. Ann Arbor: University of Michigan Press.
- Roach, P. (2000). *English Phonetics and Phonology*. 3rd edn. Cambridge: CUP.
- Tench, P. (1990). *The Roles of Intonation in English Discourse*. Frankfurt am Main: Peter Lang.
- Tench, P. (1996). *The Intonation Systems of English*. London: Cassel